情報メディア 34−5
(1998. 11. 26)

クレオール語に見る言語の本質

田中克彦
一橋大学

伝統的な言語学では、それぞれの言語を個別に切りはなして研究してきた。(ここではいわゆる「比較言語学」のことは別にして考える。それは複数の言語を扱ってはいても、単一の「祖語」の復元を目ざすものだから。) 言語を相互に相手を寄せつけない「閉じられた体系」として考えることを前提にしているからである。

しかし言語というものは内部には方言的多様性を含み、また外に向かっては、様々な構造の異なる言語 (外国語) からの影響にさらされている。これを言語間の接触という。たとえば日本人が英語を話したら、そこには、発音、文法、語彙などの点で日本語の特徴をとどめた英語が現れます。このような場に双方が、あるいは片方が、文字で書かれておらず、全く自然に出あったとすれば、それらの言葉はどうなるか。(原始時代の人類の言語はそのようであったと想像される。) 英語は日本語風にゆがめられて相当に単純化する。そこに生まれるのは、その場限りのまにあわせのピジン英語である。しかし、このピジンは、もし何らかの必要から日常語として何代にもわたって使われているうちについには安定した母語となり、独立の言語の観を呈するようになる。それをクレオール (語) と呼ぶ。

英語はアングロ・サクソン語の上にノルマン・フランス語がかぶさって、ゲルマン語であってもロマンス語の影響をいちじるしく受けて成立したという意味でクレオール語だと主張する人もいる。

さてクレオール語の特徴は、もとの母胎となった言語に比べて文法が単純化する傾向にあることだ。しかもその単純化には一般性がある。この一般性は、言語の普遍性とも一致するのではないかという見解がでてくるのは当然である。

クレオール語は規範の圧力をほとんど受けず、いわば自生的に成立したものであるが、ヨーロッパ語から文法の不規則を除き、屈折を除いて作られたのがエスペラントだとすればエスペラントは熟慮と計画のもとに生まれたクレオール語だということができるだろう。こうしたことを考えながら、日本語を含む個々の言語の変化と構造の本質について考えてみたい。